西日本新聞　2011年　12月19日　月曜日

この人 この1年 熊本2011

④

水俣市久木野地区の村おこし施設・愛林館館長

沢畑　亨さん（50）

今後2000年暮らせる村を

再認識

―「愛林館」の活動テーマは「風土、循環、自立に基づく村おこし」ですね。今年は特に、大震災や原発事故が起きた今年は特に、このテーマと同一線上にある地域の絆、自然に配慮した暮らしが見直されました。

「私たちの目標は、きれいな空気を生み出し水と土を守るといった、森と棚田の恵みを大切にし、今後2千年間、豊かに暮らせる村をつくることです。近代化は多くのエネルギーを必要とし、国は原発を推進しましたが、人間がコントロールできるようなものではないことが明らかになりました。私たちは制御可能な技術で取り組みます」

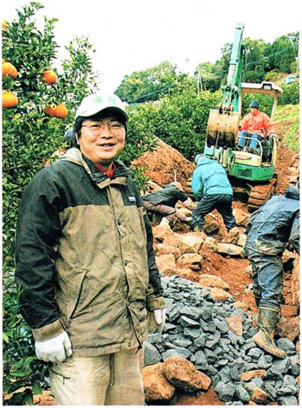
―技術とは具体的に。

「根本的なところで言うと、土を耕して植物を育てること。ほかにも炭焼きや豆腐づくり、手作りのマーマレードやブルーベリージャムなど、この地域にある素材や風土を生かしたものづくりの技術を指しています」

「インターネットも、その一つ。ネットに振り回されるのではなく、使いこなす。昨年から始めた久木野特産の茶葉やジャム、米、ダイコンの寒漬けを一箱にまとめたお歳暮用の『山羊箱（やぎばこ）』は、ネットだけで100箱近い売り上げがあります」

―久木野地区は、県最南端に位置する水俣市の中心部からさらに車で30分ほどの山里です。ネットが都会との距離感を縮めているのですね。

「新しい技術を否定はしません。ただ、効果的に使う必要がある。例えば田畑の収量を増やそうと思えば、化学肥料に頼るのが手っ取り早い。以前は牛や馬、人間のふんを発酵させて肥料にし、そこで採れた野菜を人間が食べ、さらに肥料ができていました。これを化学肥料に置き換えることで収量は伸び、肥えくみなどの労働から解放されましたが、物質の循環は断たれた。本来の土壌の力を高め、効果的に肥料を投入することが大切でしょう。新技術を使いはするが依存はしない。私はこれを『近代化の卒業』とか『超越』といった概念でとらえています」



水俣市袋のミカン畑で石積みをする沢畑さん。寒さを忘れるほど夢中になるという

―そうした暮らしを広めようと、さまざまなイベントを打っていますね。今年は各地で自粛が相次ぎましたが、愛林館でも自粛されましたか。

「九州には、震災の直接的な影響はありませんでした。だからこそ、こちらはきちんと暮らし、義援金などのできることで東北を支えないといけないと思いました。イベントを自粛しても意味はない。むしろせっかく企画されていたイベントがなくなったことで『その程度のやる気しかなかったのかな』と、主催者側の本音が見えてしまった部分はあります」

―正しいと感じること、必要だと思うことは貫く、ということですね。しかし、愛林館主催の棚田の草刈りを手伝う「田助手（たすけて）」や石積み教室など、失礼ですが、わざわざ苦労をしに来る人がいるのだろうか、とも思ってしまいますが…。

「やってみると分かりますよ。夢中になって、気付くと雑草がきれいになくなっていたり、石積みが完成していたり。あの達成感はたまりません。わざわざ福岡や近畿地方から来る人もいます」

「石積みは100年は保ちます。熊本城の石垣だと400年たってもビクともしません。目標とする2千年暮らせる村づくりの、過程にあるものだと思っています」

（聞き手は水俣支局・重川英介）

愛林館　1988年に廃線になったＪＲ山野線の久木野駅跡地を利用し、94年に水俣市が建設。地元住民による久木野地域振興会が管理し、全国に公募した館長の職に、東大大学院林学専攻修士課程を修了後、百貨店勤務を経て環境問題などについて活動していた沢畑さんが選ばれた。館長職の傍ら、熊本大などの非常勤講師を務める。棚田のあぜ道に竹灯籠を並べる「棚田のあかり」、しし鍋が振る舞われるマラソン大会など、年間を通してイベントを企画。20日まで石積み教室を開催中。同館＝0966（69）0485。